日本現代文學全集・講談社版 65

横光利一集

編集
伊藤　整
龜井勝一郎
中村光夫
平野　謙
山本健吉

日本現代文學全集
64
瀧井孝作・尾崎一雄・網野菊集

編者
伊藤整
龜井勝一郎
中村光夫
平野謙
山本健吉

昭和41年3月10日　印刷
昭和41年3月19日　發行

定價　500圓
© KÔDANSHA 1966

著者　瀧井孝作　尾崎一雄　網野菊

發行者　野間省一

印刷者　北島織衞

發行所　株式會社講談社
東京都文京區音羽町3～19
電話東京（942）1111（大代表）
振替東京 3930

印刷　大日本印刷株式會社
寫眞製版印刷　株式會社興陽社
製本　株式會社大進堂
製函　株式會社岡山紙器所
　　株式會社第一紙業社
背皮　株式會社石井
表紙クロス　日本クロス工業株式會社
口絵用紙　日本加工製紙株式會社
本文用紙　本州製紙株式會社
函貼用紙　安倍川工業株式會社
見返し用紙　三菱製紙株式會社
扉用紙　神崎製紙株式會社

落丁本・亂丁本はお取りかえいたします。

横光利一集　目次

卷頭寫眞

筆蹟

蠅……五

春は馬車に乘つて……九

花園の思想……一七

上海……二七

機械……一三三

旅愁……一三六

夜の靴……三八七

純粋小説論……四六一
ある夜……四六九
北京と巴里……四七四
油（詩）……八
俳句抄
作品解説……河上徹太郎　四七九
横光利一入門……澤見　淵　四八四
年譜……四九一
参考文献……三〇一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

横光利一集

古里を
遠さかりたる
氷かな

横光

蠅

一

眞夏の宿場は空虛であつた。ただ眼の大きな一疋の蠅だけは、薄暗い厩の隅の蜘蛛の網にひつかかると、後肢で網を跳ねつつ暫くぶらぶらと搖れてゐた。と、豆のやうにぽたりと落つた。さうして、馬糞の重みに斜めに突き立つてゐる藁の端から、裸體にされた馬の背中まで這ひ上つた。

二

馬は一條の枯草を奥齒にひつ掛けたまま、猫背の老いた馭者の姿を捜してゐる。

馭者は宿場の横の饅頭屋の店頭で、將棋を三番さして負け通した。

「なに。文句を云ふな。もう一番ぢや。」

すると、廂を脱れた日の光は、彼の腰から、圓い荷物のやうな猫背の上へ乘りかかつて來た。

三

宿場の空虛な場庭へ一人の農婦が駈けつけた。彼女は此の朝早く、街に務めてゐる息子から危篤の電報を受けとつた。それから露に濕つた三里の山路を駈け續けた。

「馬車はまだかのう？」

彼女は馭者部屋を覗いて呼んだが返事がない。

「馬車はまだかのう？」

歪んだ壘の上には湯呑が一つ轉つてゐて、中から酒色の番茶がひとり靜に流れてゐた。農婦はうろうろと場庭を廻ると、饅頭屋の横からまた呼んだ。

「馬車はまだかのう？」

「先刻出ましたぞ。」

答へたのはその家の主婦である。

「出たかのう。馬車はもう出ましたかのう。いつ出ましたな。もうちと早く來ると良かつたのぢやが、もう出ぬぢやろか？」

農婦は性急な泣き聲でさう云ふ中に、早や泣き出した。が、涙も拭かず、往還の中央に突き立つてゐてから、街の方へすたすたと歩き始めた。

「二番が出るぞ。」

猫背の馭者は將棋盤を見詰めたまま農婦に云つた。農婦は歩みを停めると、くるりと向返つてその淡い眉毛を吊り上げた。

「出るかの。直ぐ出るかの。倅が死にかけてをるのぢやが、間に合せておくれかの？」

「桂馬と來たな。」

「まアまア嬉しや。街までどれ程かかるぢやろ。いつ出しておくれるのう？」

「二番が出るわい。」と馭者はぽんと歩を打つた。

「出ますかな、街まで三時間もかかりますかいな。三時間はたつぷりかかりますやろ。倅が死にかけてゐますのぢやが、間に合せておくれかのう？」

四

野末の陽炎の中から、種蓮華を叩く音が聞えて來る。若者と娘は

宿場の方へ急いで行つた。娘は若者の肩の荷物へ手をかけた。
「持たう。」
「なアに。」
「重たからうが。」
若者は默つていかにも輕さうな容子を見せた。が、額から流れる汗は鹽辛かつた。
「馬車はもう出たかしら。」娘は呟いた。
若者は荷物の下から、眼を細めて太陽を眺めると、
「一寸暑うなつたな、まだぢやらう。」
「誰ぞもう追ひかけて來てゐるね。」
若者は默つてゐた。
「お母が泣いてるわ。きつと。」
「馬車屋はもう直ぐそこぢや。」
二人は默つて了つた。牛の鳴き聲がした。
「知れたらどうしよう。」と娘は云ふと一寸泣きさうな顏をした。
種蓮華を叩く音だけが、幽に足音のやうに迫つて來る。
娘は後ろを向いて見て、それから若者の肩の荷物にまた手をかけた。
「私が持たう。もう肩が直つたえ。」
若者は矢張り默つてどしどし歩き續けた。が、突然、
「知れたら又逃げるだけぢや。」と呟いた。

五

宿場の場庭へ、母親に手を曳かれた男の子が指を銜へて這入つて來た。
「お母ア、馬馬。」
「ああ、馬馬。」男の子は母親から手を振り切ると、厩の方へ馳けて來た。さうして二間程離れた場庭の中から馬を見ながら、「こりやッ、こりやッ。」と叫んで片足で地を打つた。
馬は首を擡げて耳を立てた。男の子は馬の眞似をして首を上げたが、耳が動かなかつた。で、ただ矢鱈に馬の前で顏を顰めると、再び「こりやッ、こりやッ。」と叫んで地を打つた。
馬は槽の手蔓に口をひつ掛けながら、又その中へ顏を隱して馬草を食つた。
「お母ア、馬馬。」
「ああ、馬馬。」

六

「あつと、待てよ。これは倅の下駄を買ふのを忘れたぞ。あ奴は西瓜が好きぢや。西瓜を買ふと、俺もあ奴も好きぢやで兩得ぢや。」
田舍紳士は宿場へ着いた。彼は四十三になる。三十三年貧困と戰ひ續けた効あつて、昨夜漸く春蠶の仲買で八百圓を手に入れた。今彼の胸は未來の畫策のために詰つてゐる。けれども、昨夜錢湯へ行つたとき、八百圓の札束を鞄に入れて洗ひ場まで持つて這入つて、笑はれた記憶については忘れてゐた。
農婦は場庭の床几から立ち上ると、彼の傍へよつて來た。
「馬車はいつ出るのでござんせうな。倅が死にかかつてゐますので、早く行かんと死に目に逢へまいと思ひましてな。」
「そりやいかん。」
「もう出るのでござんしよな。もう出るつて、さつき云はしやつたがの。」
「さアて、何してをるやろな。」
若者と娘は場庭の中へ入つて來た。農婦はまた二人の傍へ近寄つた。
「馬車に乘りなさるのかな。馬車は出ませんぞな。」
「出ませんか？」と若者は訊き返した。
「出ませんの？」と娘は云つた。
「もう二時間も待つてますのやが、出ませんぞな。街まで三時間か

かりますやろ、もう何時になつてゐますかな。九時になつてゐますかな、街へ着くと正午になりますやろか。」

「そりや正午や。」と田舎紳士は横から云つた。農婦はくるりと彼の方をまた向いて、

「正午になりますかいな。それまでにや死にますやろな。正午になりますかいな。」

と云ふ中にまた泣き出した。が、直ぐ饅頭屋の店頭へ馳けて行つた。

「まだかのう。馬車はまだなかなか出ぬぢやろか？」

猫背の馭者は將棋盤を枕にして仰向きになつたまま、簀の子を洗つてゐる饅頭屋の主婦の方へ頭を向けた。

「饅頭はまだ蒸さらんかいの？」

七

馬車は何時になつたら出るのであらう。宿場に集つた人々の汗は乾いた。併し、馬車は何時になつたら出るのであらう。これは誰も知らない。だが、もし知り得ることの出來るものがあつたとすれば、それは饅頭屋の竈の中で、漸く脹れ始めた饅頭であつた。何ぜかと云へば、此の宿場の猫背の馭者は、まだその日、誰も手をつけない蒸し立ての饅頭に初手をつけると云ふことが、それほど潔癖から長い月日の間獨身で暮らさねばならなかつたと云ふ、その日その日の、最高の慰めとなつてゐたのであつたから。

八

宿場の時計が十時を打つた。饅頭屋の竈は湯氣を立てて鳴り出した。

ザク、ザク、ザク。猫背の馭者は馬草を切つた。馬は猫背の横で、水を十分飲み溜めた。

九

馬は馬車の車體に結ばれた。農婦は眞先に車體の中へ乘り込むと、街の方を見續けた。

「乘つとくれやア。」と猫背は云つた。

五人の乘客は、傾く踏み段に氣をつけて農婦の傍へ乘り始めた。

猫背の馭者は、饅頭屋の簀の子の上で、綿のやうに脹らんでゐる饅頭を腹掛けの中へ押し込むと、馭者臺の上にその背を曲げた。喇叭が鳴つた。鞭が鳴つた。

眼の大きなかの一匹の蠅は馬の腰の餘肉（あまにく）の匂ひの中から飛び立つた。さうして車體の屋根の上にとまり直ると、今さきに、漸く蜘蛛の網からその生命をとり戻した身體を休めて、馬車と一緒に搖れて行つた。

馬車は炎天の下を走り通した。さうして並木をぬけ、長く續いた小豆畑の横を通り、亞麻畑と桑畑の間を搖れつつ森の中へ割り込むと、綠色の森は、漸く溜つた馬の額の汗に映つて逆さまに搖らめいた。

十

馬車の中では、田舎紳士の饒舌が、早くも人々を五年以來の知己にした。しかし、男の子はひとり車體の柱を握つて、その生々とした眼で野の中を見續けた。

「お母ア、梨梨。」

「ああ、梨梨。」

馭者臺では鞭が動き停つた。農婦は田舎紳士の帶の鎖に眼をつけた。

「もう幾時ですかいな。十二時は過ぎましたかいな。街へ着くと正午過ぎになりますやろな。」

馭者臺で喇叭が鳴らなくなつた。さうして、腹掛けの饅頭を、今

や盡く胃の腑の中へ落し込んで了つた馭者は、一層猫背を張らせて居眠り出した。その居眠りは、馬車の上から、かの眼の大きい蠅が押し默つた數段の梨畑を眺め、眞夏の太陽の光を受けて眞赤に榮えた赤土の斷崖を仰ぎ、突然に現れた激流を見下して、さうして、馬車が高い崖路の高低でかたかたときしみ出す音を聞いてまだ續いた。併し、乘客の中で、その馭者の居眠りを知つてゐた者は、僅にただ蠅一疋であるらしかつた。蠅は車體の屋根の上から、馭者の垂れ下つた半白の頭に飛び移り、それから、濡れた馬の背中に留つて汗を舐めた。

馬車は崖の頂上へさしかかつた。馬は前方に現れた眼匿し中の路に從つて柔順に曲り始めた。しかし、そのとき、彼は自分の胴と、車體の幅とを考へることが出來なかつた。一つの車輪が路から外れた。突然、馬は車體に引かれて突き立つた。瞬間、蠅は飛び上つた。と、車體と一緒に崖の下へ墜落して行く放埒な馬の腹が眼についた。さうして、人馬の悲鳴が高く發せられると、河原の上では、壓し重つた人と馬と板片との塊りが、沈默したまま動かなかつた。が、眼の大きな蠅は、今や完全に休まつたその羽根に力を籠めて、ただひとり、悠々と青空の中を飛んでいつた。

（大正十二年五月　文藝春秋）

油

暗夜の襲撃、その時には私は水々しい一本の魚雷になり、激浪の底で傾きながら飛ぶ龍骨の速度を狙つた。船體に觸れる船體の恐るべき感覺に身は澄み渡り、インクのやうな海底を流れる鐵の接線に祈禱を上げる。私は鐵であらうか水であらうか。私は擦れ合ふ鐵と鐵との慧敏な體力の間できりりと渦を卷き上げながら逸走すると、早やはるかに遠く遊泳してゐる船底の黑さを仰いだ。さうして私はとある島影で立ち停ると、油が初めて私の皮膚から水の上に擴がるのを感じた。私は死がいかばかり私にぴつたりと絡みついてゐたかを知つたのは、そのときである。

（昭和五年五月）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

春は馬車に乘つて

海濱の松が風に鳴り始めた。庭の片隅で一叢の小さなダリヤが縮んでいつた。

彼は妻の寢てゐる寢臺の傍から、泉水の中の鈍い龜の姿を眺めてゐた。龜が泳ぐと、水面から輝り返された明るい水影が、乾いた石の上で搖れてゐた。

「まアね、あなた、あの松の葉が此の頃それは綺麗に光るのよ。」と妻は云つた。

「お前は松の木を見てゐたんだな。」

「ええ。」

「俺は龜を見てたんだ。」

二人はまたそのまま默り出さうとした。

「お前はそこで長い間寢てゐて、お前の感想は、たつた松の葉が美しく光ると云ふことだけなのか。」

「ええ、だつて、あたし、もう何も考へないことにしてゐるの。」

「人間は何も考へないで寢てゐられる筈がない。」

「そりや考へることは考へるわ。あたし、早くよくなつて、シャッシャッと井戸で洗濯がしたくつてならないの。」

「洗濯がしたい？」

彼はこの意想外の妻の慾望に笑ひ出した。

「お前はをかしな奴だね。俺に長い間苦勞をかけておいて、洗濯がしたいとは變つた奴だ。」

「でも、あんなに丈夫な時が羨ましいの。あなたは不幸な方だわね。」

「うむ。」と彼は云つた。

彼は妻を貰ふまでの四五年に渡る彼女の家庭との長い爭鬪を考へた。それから妻と結婚してから、母と妻との間に挾まれた二年間の苦痛な時間を考へた。彼は母が死に、妻と二人になると、急に妻が胸の病氣で寢て了つた此の一年間の艱難を思ひ出した。

「なるほど、俺ももう洗濯がしたくなつた。」

「あたし、いま死んだつてもういいわ。だけども、あたし、あなたにもつと恩を返してから死にたいの。此の頃あたし、そればかり苦になつて。」

「俺に恩を返すつて、どんなことをするんだね。」

「そりや、あたし、あなたを大切にして、……」

「それから。」

「もつといろいろすることがあるわ。」

――しかし、もうこの女は助からない、と彼は思つた。

「俺はさう云ふことは、どうだつていいんだ。ただ俺は、さうだね。俺は、ただ、ドイツのミュンヘンあたりへいつぺん行つて、それも、雨の降つてゐる所でなくちや行く氣がしない。」

「あたしも行きたい。」と妻は云ふと、急に寢臺の上で腹を波のやうにうねらせた。

「お前は絶對安靜だ。」

「いや、いや、あたし、歩きたい。起してよ、ね、ね。」

「駄目だ。」

「あたし、死んだつていいから。」

「死んだつて、始まらない。」

「いいわよ、いいわよ。」

「まア、ぢつとしてるんだ。それから、一生の仕事に、松の葉がどんなに美しく光るかつて云ふ形容詞を、たつた一つ考へ出すのだ

ね。」

妻は默つて了つた。彼は妻の氣持ちを轉換さすために、柔らかな話題を選擇しようとして立ち上つた。

海では午後の波が遠く岩にあたつて散つてゐた。一艘の舟が傾きながら鋭い岬の尖端を廻つていつた。渚では逆卷く濃藍色の背景の上で、子供が二人湯氣の立つた芋を持つて紙屑のやうに坐つてゐた。

彼は自分に向つて次ぎ次ぎに來る苦痛の波を避けようと思つたことはまだなかつた。此の夫々に質を違へて襲つて來る苦痛の波の原因は、自分の肉體の存在の最初に於て働いてゐたやうに思はれたからである。彼は苦痛を、譬へば砂糖を甜める舌のやうに、あらゆる感覺の眼を光らせて吟味しながら甜め盡してやらうと決心した。さうして最後に、どの味が美味かつたか。——俺の身體は一本のフラスコだ。何ものよりも、先づ透明でなければならぬ。と彼は考へた。

ダリヤの莖が干枯びた繩のやうに地の上でむすぼれ出した。潮風が水平線の上から終日吹きつけて來て冬になつた。

彼は砂風の卷き上る中を、一日に二度づつ妻の食べたがる新鮮な鳥の臟物を捜しに出かけて行つた。彼は海岸町の鳥屋といふ鳥屋を片端から訪ねていつて、そこの黄色い俎の上から一應庭の中を眺め廻してから訊くのである。

「臟物はないか、臟物は。」

彼は運好く瑪瑙のやうな臟物を氷の中から出されると、勇敢な足どりで家に歸つて妻の枕元に竝べるのだ。

「この曲玉のやうなのは鳩の腎臟だ。この光澤のある肝臟はこれは家鴨の生膽だ。これはまるで、嚙み切つた一片の唇のやうで、此の小さな青い卵は、これは崑崙山の翡翠のやうで。」

すると、彼の饒舌に煽動させられた彼の妻は、最初の接吻を迫るやうに、華やかに床の中で食慾のために身悶えした。彼は慘酷に臟物を奪ひ上げると、直ぐ鍋の中へ投げ込んで了ふのが常であつた。

妻は檻のやうな寢臺の格子の中から、微笑しながら絶えず湧き立つ鍋の中を眺めてゐた。

「お前をここから見てゐると、實に不思議な獸だね。」と彼は云つた。

「まア、獸だつて。あたし、これでも奥さんよ。」

「うむ、臟物を食べたがつてゐる檻の中の奥さんだ。お前は、いつの場合に於ても、どこか、ほのかに慘忍性を湛へてゐる。」

「それはあなたよ。あなたは理智的で、慘忍性をもつてゐて、いつでも私の傍から離れたがらうとばかり考へていらしつて。」

「それは、檻の中の理論である。」

彼は彼の額に煙り出す片影のやうな皺さへも、敏感に見逃さない妻の感覺を誤魔化すために、此の頃いつも此の結論を用意してゐなければならなかつた。それでも時には、妻の理論は急激に傾きながら、彼の急所を突き通して旋廻することが度々あつた。

「實際、俺はお前の傍に坐つてゐるのは、そりやいやだ。肺病と云ふものは、決して幸福なものではないからだ。」

彼はさう直接妻に向つて逆襲することがあつた。

「さうではないか。俺はお前から離れたとしても、此の庭をぐるぐる廻つてゐるだけだ。俺はいつでも、お前の寢てゐる寢臺から綱をつけられてゐて、その綱の畫く圓周の中で廻つてゐるより仕方がない。これは憐れな狀態である以外の、何物でもないではないか。」

「あなたは、あなたは、遊びたいからよ。」と妻は口惜しさうに云つた。

「お前は遊びたかないのかね。」

「あなたは、他の女の方と遊びたいのよ。」

「しかし、さう云ふことを云ひ出して、もし、さうだつたらどうするんだ。」

そこで、妻が泣き出して了ふのが例であつた。彼は、はッとして、

また逆に理論を極めて物柔らかに解きほぐして行かねばならなかつた。

「なるほど、俺は、朝から晩まで、お前の枕元にゐなければならないと云ふのはいやなのだ。それで俺は、一刻も早く、お前をよくしてやるために、かうしてぐるぐる同じ庭の中を廻つてゐるのではないか。これには俺とて一通りのことぢやないさ。」

「それはあなたのためだからよ。私のことを、一寸もよく思つてして下さるんぢやないんだわ。」

彼はここまで妻から肉迫されて來ると、當然彼女の檻の中の理論にとりひしがれた。だが、果して、自分は自分のためにのみ、此の苦痛を嚙み殺してゐるのだらうか。

「それはさうだ、俺はお前の云ふやうに、俺のために何事も忍耐してゐるのにちがひない。しかしだ、俺が俺のために忍耐してゐると云ふことは、一體誰故にこんなことをしてゐなければ、ならないんだ。俺はお前さへゐなければ、こんな馬鹿な動物園の眞似はしてゐたくないんだ。そこをしてゐると云ふのは、誰のためだ。お前以外の俺のためだとでも云ふのか、馬鹿馬鹿しい。」

かう云ふ夜になると、妻の熱は定つて九度近くまで昇り出した。彼は一本の理論を鮮明にしたために、氷嚢の口を、開けたり閉めたり、夜通ししなければならなかつた。

しかし、なほ彼は自分の休息する理由の說明を明瞭にするために、此の懲りるべき理由の整理を、殆ど日日し續けなければならなかつた。彼は食ふためと、病人を養ふためとに別室で仕事をした。すると、彼女は、また檻の中の理論を持ち出して彼を攻めたてて來るのである。

「あなたは、私の傍をどうしてさう離れたいんでせう。今日はたつた三度より此の部屋へ來て下さらないんですもの。分つてゐてよ。あなたは、さう云ふ人なんですもの。」

「お前と云ふ奴は、俺がどうすればいいと云ふんだ。俺は、お前の病氣をよくするために、藥と食物とを買はなければならないんだ。誰がぢつとしてゐて金をくれる奴があるものか。お前は俺に手品でも使へと云ふんだね。」

「だつて、仕事なら、ここでも出來るでせう。」と妻は云つた。

「いや、ここでは出來ない。俺はほんの少しでも、お前のことを忘れてゐるときでなければ出來ないんだ。」

「そりやさうですわ。あなたは、二十四時間仕事のことより何も考へない人なんですもの。あたしなんか、どうだつていいんですわ。」

「お前の敵は俺の仕事だ。しかし、お前の敵は、實は絕えずお前を助けてゐるんだよ。」

「あたし、淋しいの。」

「いづれ、誰だつて淋しいにちがひない。」

「あなたはいいわ。仕事があるんですもの。あたしは何もないんだわ。」

「捜せばいいぢやないか。」

「あたしは、あなた以外に捜せないんです。あたしは、ぢつと天井を見て寢てばかりゐるんです。」

「もう、そこらでやめてくれ。どちらも淋しいとしておかう。俺には締切りがある。今日書き上げないと、向うがどんなに困るかしれないんだ。」

「どうせ、あなたはさうよ。あたしより、締切りの方が大切なんですから。」

「いや、締切りと云ふことは、相手のいかなる事情をも退けると云ふ張り札なんだ。俺は此の張り札を見て引き受けて了つた以上、自分の事情なんか考へてはゐられない。」

「さうよ、あなたはそれほど理智的なのよ。いつでもさうなの、あたし、さう云ふ理智的な人は、大嫌ひ。」

「お前は俺の家の者である以上、他から來た張り札に對しては、俺と同じ責任を持たなければならないんだ。」

「そんなもの、引き受けなければいいぢやありませんか。」
「しかし、俺とお前の生活はどうなるんだ。」
「あたし、あなたがそんなに冷淡になる位なら、死んだ方がいいの。」
すると、彼は黙つて庭へ飛び降りて深呼吸をした。それから、彼はまた風呂敷を持つて、その日の臓物を買ひにこつそりと町の中へ出かけていつた。
しかし、此の彼女の「檻の中の理論」は、その檻に繋がれて廻つてゐる彼の理論を、絶えず全身的な興奮をもつて、殆ど間髪の隙間をさへも洩らさずに追つ駈けて來るのである。此のため彼女は、彼女の檻の中で製造する病的な理論の鋭利さのために、自身の肺の組織を日日加速度的に破壞していつた。
彼女の曾ての圓く張つた滑らかな足と手は、竹のやうに痩せて來た。胸は叩けば、輕い張子のやうな音を立てた。さうして、彼女は彼女の好きな鳥の臓物さへも、もう振り向きもしなくなつた。
彼は彼女の食慾をすすめるために、海からとれた新鮮な魚の數々を緣側に竝べて說明した。
「これは鮟鱇で踊り疲れた海のピエロ。これは海老で車海老、海老は甲冑をつけて倒れた海の武者。この鯵は暴風で吹きあげられた木の葉である。」
「あたし、それより聖書を讀んでほしい。」と彼女は云つた。
彼はポウロのやうに魚を持つたまま、不吉な豫感に打たれて妻の顏を見た。
「あたし、もう何も食べたかないの、あたし、一日に一度づつ聖書を讀んで貰ひたいの。」
そこで、彼は仕方なくその日から汚れたバイブルを取り出して讀むことにした。
「エホバよわが祈りをききたまへ。願くばわが號呼の聲の御前にいたらんことを。わが窮苦の日、み顏を蔽ひたまふなかれ。なんぢの耳をわれに傾け、我が呼ぶ日にすみやかに我にこたへたまへ。わがもろもろの日は煙のごとく消え、わが骨は焚木のごとく焚るるなり。わが心は草のごとく擊れてしをれたり。われ糧をくらふを忘れしによる。」
しかし、不吉なことはまた續いた。或る日、暴風の夜が開けた翌日、庭の池の中からあの鈍い龜が逃げて了つてゐた。
彼は妻の病勢がすすむにつれて、彼女の寢臺の傍からますます離れることが出來なくなつた。彼女の口から、啖が一分毎に出始めた。彼女は自分でそれをとることが出來ない以上、彼がとつてやるよりとるものがなかつた。また彼女は激しい腰痛を訴へ出した。咳の大きな發作が、晝夜を分たず五回ほど突發した。その度に、彼女は自分の胸を引つ搔き廻して苦しんだ。彼は病人とは反對に落ちつかなければならないと考へた。しかし、彼女は、彼が冷靜になればなるほど、その苦悶の最中に咳を續けながら彼を罵つた。
「人の苦しんでゐるときに、あなたは、あなたは、他のことを考へて。」
「まア、靜まれ、いま呶鳴つちゃ。」
「あなたが、落ちついてゐるから、憎らしいのよ。」
「俺が、今狼狽してては、」
「やかましい。」
彼女は彼の持つてゐる紙をひつたくると、自分の啖を横なぐりに拭きとつて彼に投げつけた。
彼は片手で彼女の全身から流れ出す汗を所を擇ばず拭きながら、片手で彼女の口から咳出す啖を絶えず拭きとつてゐなければならなかつた。彼の蹲んだ腰はしびれて來た。彼女は苦しまぎれに、天井を睨んだまま、兩手を振つて彼の胸を叩き出した。汗を拭きとる彼のタオルが、彼女の寢卷にひつかかつた。すると、彼女は、蒲團を蹴りつけ、身體をばたばた波打たせて起き上らうとした。
「駄目だ、駄目だ、動いちゃ。」

「苦しい、苦しい。」
「落ちつけ。」
「苦しい。」
「やられるぞ。」
「うるさい。」
彼は楯のやうに打たれながら、彼女のざらざらした胸を撫で擦つた。
しかし、彼は此の苦痛な頂天に於てさへ、妻の健康な時に彼女から與へられた自分の嫉妬の苦しみよりも、寧ろ數段の柔かさがあると思つた。してみると彼は、妻の健康の肉體よりも、此の腐つた肺臟を持ち出した彼女の病體の方が、自分にとつてはより幸福を與へられてゐると云ふことに氣がついた。
――これは新鮮だ。俺はもうこの新鮮な解釋によりすがつてゐるより仕方がない。
彼は此の解釋を思ひ出す度に、海を眺めながら、突然あはあはと大きな聲で笑ひ出した。
すると、妻はまた、檻の中の理論を引き摺り出して苦々しさうに彼を見た。
「いいわ、あたし、あなたが何ぜ笑つたのかちやんと知つてるんですもの。」
「いや、俺はお前がよくなつて、洋裝をきたがつて、ぴんぴんはしやがれるよりは、靜に寢てゐられる方がどんなに有難いかしれないんだ。第一、お前はさうしてゐると、蒼ざめてゐて、氣品がある。まア、ゆつくり寢てゐてくれ。」
「あなたは、さう云ふ人なんだから。」
「さう云ふ人なればこそ、有難がつて看病が出來るのだ。」
「看病看病つて、あなたは二言目には看病を持ち出すのね。」
「これは俺の誇りだよ。」
「あたし、こんな看病なら、して欲しかないの。」
一所が、俺が譬へば三分間向うの部屋へ行つてゐたとする。すると、お前は三日も拋つたらかされたやうに云ふではないか、さア、何とか返答してくれ。」
「あたしは、何も文句を云はずに、看病がして貰ひたいの。いやな顏をされたり、うるさがられたりして看病されたつて、ちつとも有難いと思はないわ。」
「しかし、看病と云ふのは、本來うるさい性質のものとして出來上つてゐるんだぜ。」
「そりゃ分つてゐるわ。そこをあたし、默つてして貰ひたいの。」
「さうだ、まあ、お前の看病をするためには、一族郎黨を引きつれて來ておいて、金を百萬圓ほと積みあげて、それから、博士を十人ほどと、看護婦を百人ほどと。」
「あたしは、そんなことなんかして貰ひたかないの、あたし、あなた一人にして貰ひたいの。」
「つまり、俺が一人で、十人の博士の眞似と、百人の看護婦と、百萬圓の頭取の眞似をしろつて云ふんだね。」
「あたし、そんなことなんか云つてやしない。あたし、あなたにちつと傍にゐて貰へば安心出來るの。」
「そら見ろ、だから、少々は俺の顏が顰んだり、文句を云つたりする位は我慢しろ。」
「あたし、死んだら、あなたを怨んで怨んで怨んで、そして死ぬの。」
「それ位のことなら、平氣だね。」
妻は默つて了つた。しかし、妻はまだ何か彼に斬りつけたくてならないやうに、默つて必死に頭を研ぎ澄してゐるのを彼は感じた。
しかし彼は、彼女の病勢を進ます彼自身の仕事と生活のことを考へねばならなかつた、だが、彼は妻の看病と睡眠の不足から、だんだんと疲れて來た。彼は疲れれば疲れるほど、彼の仕事が出來なくなるのは分つてゐた。彼の仕事が出來なければ出來ないほど、彼の生活が困り出すのも定つてゐた。それにも拘らず、昂進して來る病

人の費用は、彼の生活の困り出すのに比例して增して來るのは明かなことであつた。然も、なほ、いかなることがあらうとも、彼がますます疲勞して行くことだけは事實である。

——それなら俺は、どうすれば良いのか。

——もうここらで俺もやられたい。さうしたら、俺は、なに不足なく死んでみせる。

彼はさう思ふことも時々あつた。しかし、また彼は、此の生活の難局をいかにして切り拔けるか、その自分の手腕を一度はつきり見たくもあつた。彼は夜中起されて妻の痛む腹を擦りながら、

「なほ、憂きことの積れかし、なほ憂きことの積れかし。」

と呟くのが癖になつた。ふと彼はさう云ふ時、茫々とした青い羅紗の上を、撞かれた球がひとり飄々として轉がつて行くのが目に浮んだ。

——あれは俺の玉だ、しかし、あの俺の玉を、誰がこんなに出鱈目に突いたのか。

「あなた、もつと、强く擦つてよ、あなたは、どうしてさう面倒臭がりになつたのでせう。もとはさうぢやなかつたわ。もつと親切に、あたしのお腹を擦つて下さつたわ。それだのに、此の頃は、ああ痛、ああ痛。」と彼女は云つた。

「俺もだんだん疲れて來た。もう直ぐ、俺も參るだらう。さうしたら、二人がここで呑氣に寢轉んでゐようぢやないか。」

すると、彼女は急に靜になつて、床の下から鳴き出した蟲のやうな憐れな聲で呟いた。

「あたし、もうあなたにさんざ我ままを云つたわね。もうあたし、これでいつ死んだつていいわ。あたし滿足よ。あなた、もう寢て頂戴な。あたし我慢をしてゐるから。」

彼はさう云はれると、不覺にも涙が出て來て、撫でてる腹の手を休める氣がしなくなつた。

庭の芝生が冬の潮風に枯れて來た。硝子戸は終日辻馬車の扉のやうにがたがたと慄へてゐた。もう彼は家の前に、大きな海のひかへてゐるのを長い間忘れてゐた。

或る日彼は醫者の所へ妻の藥を貰ひに行つた。

「さうさう。もつと前からあなたに云はう云はうと思つてゐたんですが、」

と醫者は云つた。

「あなたの奧さんは、もう駄目ですよ。」

「はア。」

彼は自分の顏がだんだん蒼ざめて行くのをはつきりと感じた。

「もう左の肺がありませんし、それに右も、もう餘程進んでをります。」

彼は海濱に添つて、車に搖られながら荷物のやうに歸つて來た。晴れ渡つた明るい海が、彼の顏の前で死をかくまつてゐる單調な幕のやうに、だらりとしてゐた。彼はもうこのまま、いつまでも妻を見たくないと思つた。もし見なければ、いつまでも妻が生きてゐるのを感じてゐられるにちがひないのだ。

彼は歸ると直ぐ自分の部屋へ這入つた。そこで彼は、どうすれば妻の顏を見なくて濟まされるかを考へた。彼はそれから庭へ出ると芝生の上へ寢轉んだ。身體が重くぐつたりと疲れてゐた。涙が力なく流れて來ると彼は枯れた芝生の葉を丹念にむしつてゐた。

「死とは何だ。」

ただ見えなくなるだけだ、と彼は思つた。暫くして、彼は亂れた心を整へて妻の病室へ這入つていつた。

妻は默つて彼の顏を見詰めてゐた。

「何か冬の花でもいらないか。」

「あなた、泣いてゐたのね。」と妻は云つた。

「いや。」

「さうよ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com